

新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第23号

2004.10

ふきやこうじ 落谷虹児展 少女達の夢と憧れ

10月9日(土)～11月23日(火・祝)

落谷虹児という画家をどのくらいの方がご存知でしょうか。挿絵画家としての先輩である竹久夢二の圧倒的な知名度に比べると、まだまだ光の当たっていない感があります。今回の展覧会は、60年にわたる落谷虹児の画業を振り返って、その魅力を再発見しようという試みです。

明治31年に、おそらく水原のあたりで生まれた虹児は早くに母親を亡くし、大酒飲みの父親に代わって第二人の面倒を見ながら働きました。そのかわり、日本画家になるべく修行をし、当時文展で活躍していた新潟出身の尾竹竹坡の弟子となって上京。苦しい生活を続ける中で少女雑誌の挿絵を描きはじめたところ、その抒情的な画風が大人気となり、各誌から引っ張りだこの花形作家となりました。詩画集も数多く発表し、絵だけでなく詩も巧みでした。しかし、挿絵画家ではなく「画家」になりたいと願った虹児は大正14年パリに留学。展覧会に入選し、作品も売れるようになりましたが、日本に残した家族の生活のため帰国し、再び挿絵画家として仕事を再開します。虹児の本心とは裏腹に、雑誌の世界での人気はこの時期に絶頂期を迎え、仕事に追われる毎日が続きました。しかし、やがて戦争がはじまると虹児の画風では誌面に作品を載せることができなくなり、仕事の注文が激減します。新たな活動の場を求めた虹児は、この時期から童話や絵本の挿絵の仕事を描くようになりまし

た。晩年は個展を中心に作品を発表し、昭和54年、その人生を終えました。

展覧会では、雑誌や詩画集の表紙や挿絵原画、バリ時代の作品、絵本や童話の挿絵原画、個展作品など約350点を展示します。世紀末美術の妖しい雰囲気漂わせるペン画、抒情的な甘さを一切感じさせない戦時中の小説挿絵、童謡に添えられたあどけない子供の姿。1人の画家の仕事とは思えないその多様な画風と彼の器用さに驚かされることでしょう。これまで全く知られていなかった、虹児が挿絵を描いた戦前の英語の教科書も準備を進める中で発見されました。既に虹児をご存知の方も、《花嫁》だけではなく、彼の仕事の新たな側面に目を向けていただけたらと願っています。

(美術学芸員 小西珠緒)

県民の美の財産Ⅱ 日本美術の歩み ～近代から現代へ～

2005年1月25日(火)～3月21日(月)

江戸から明治、大正、昭和、そして平成と時代が移り変わる中で美術の分野でも様々な動きが生まれ、あるものは継続し、あるものは終息から新たな動きへと移行しながら、うねりとなって作家を後押しし、作家もまた新しい流れを積極的につくり出そうと模索するなかから多くの作品が生まれてきました。

当館の日本画、洋画のコレクションもそうした各時代と美術界の流れに無縁ではないのです。

本展は収集品一点一点が県民の財産であるということ、そしてその存在を再確認してほしいという願いから出発しているという点で昨年度開催された「県民の美の財産」展と共通の基盤に立っているといえるでしょう。

今回は日本画、洋画を中心に時代を追いながら5つのコーナーを設け、日本美術の流れと、それぞれの作品の位置を再確認してもらおうとするもので、約140点を展示します。県立近代美術館が、その開館に先立ち県美術博物館として25年余りの歴史を持っていたことをご存知のとおりです。また、昨年、県立万代島美術館の開館に伴いコレクションがさらに充実してきたこともお伝えしました。それらを併せた両館の全所蔵品から選び展示いたします。

それぞれのコーナーに沿っていくつか作品を挙げてみましょう。最初の「江戸から明治まで」では、前期に五十嵐俊明《中国

武将図屏風》、速水御舟《浦津》等の作品、後期には菱田春草《放鶴》他、全会期を通して小山正太郎《仙台の桜》、浅井忠《農人》など洋画黎明期に活躍した作家の作品が予定されています。次の「大正期の日本画・洋画」では、前期に川合玉堂《春苑》、尾竹竹坡、越堂、国観等が、後期には小野竹喬《黍熟るる鳥》、土田麦穂《芥子》等の作品が展示されます。洋画では中村彝《洲崎義郎氏の肖像》の他、萬鉄五郎、岸田劉生、等の作品が揃います。3つ目は「昭和-戦前期の絵画」です。日本画の前期では前田青邨《被物》、後期の竹内栖鳳《睡郷》他都合12点、洋画は佐伯祐三《広告塔》、佐藤哲三《農村託児所》の他16点。4つ目は「昭和-戦後期の絵画」として、横山操《炎々松島》、加山又造、星野真吾等の作品と、阿部展也など40点余りの洋画が展示されます。最後は「現在の美術」。日本画の中島千波や中野嘉之から、洋画の野見山暁治、宮崎進、そして木下晋等々19点の作品が展示されます。

これら様々な時代を背景に生まれた作品ですが、直接触れていただくことで、当館コレクションへの理解がさらに深まるものと確信します。この展覧会を通じて県民の財産としての所蔵品を誇りにしていただけたら幸いです。

(学芸課長代理 中嶋 均)

※前期・後期で一部展示替えがあります。後期：2月22日～



① 《帰途を待つ雪》（『少女画報』13巻1号口紙）1924年 個人蔵



②

② 『睡夢の夢』 洋画（『睡夢の夢』文藝社）
1924年 個人蔵
③ 《白濁像》1926年 新発田市蔵
④ 神楽原画（『はくちょうのおうし』講談社）
1956年 新発田市蔵



④



中村 彝《洲崎義彦氏の肖像》1919年



横山 操《岩々板島》1956年

あしあと

2004年4月～9月

近代日本洋画の巨匠

黒田清輝展

4/24(土)～6/6(日)



友の会のご協力により、五月の空にこのほろりがあがりました。



黒田の代表作《湖畔》について解説する黒田学芸員。



もうひとつの代表作《朝・暮・情》。



4/24(土)
講演会「黒田清輝研究の現在」
講師：田中淳氏（東京文化財研究所 黒田記念近代現代美術研究室長）
《湖畔》の描かれた場所が現在では幕張新伝のスタート地点になっているなど、数々の逸話が紹介されました。

ルーヴル美術館展

中世フランスの秘宝

7/10(土)～9/12(日)



《ライオンがいる洞窟のダニエル》の展示作業。リフトを使って慎重に行われました。



開場式（7/9）であいさつするルーヴル美術館のロウレット館長。翌10日には講演会「ルーヴルの歴史と未来」が開かれました。
また、7/31日には展覧会の監修者である馬杉宗次氏（武蔵野美術大学教授）による講演会「フランス中世美術の魅力」が開催され、好評を博しました。



8/10(火)～13(金) ルーヴル美術館館長公認彫刻教室「レリーフを作る」
講師：松田光司氏（彫刻家）

ワークショップ



8/29日 コンサート
「ロビーとびおオルガン音楽隊」
このほか、リドしおんによる「アカペ
ラの響き〜ゴシックからルネサンスへ」
(8/15) や「若林圭子セッション・コ
ンサート」(8/21) などの音楽会も盛
況でした。



9/12日 講演会「中世フランスの
美術工芸」
講師：D.G=ショウ氏（ルーヴル
美術館学芸員）



ルーヴル美術館展会場風景。会期中88,838名のお客様にご来場いただきました。



7/18日 「シリーズ展示の秘密(解説)」
制作作品の裏姿を実物、配置、高さ、照明など、展示の工夫を探ってみました。



5/8日、9日
「みんなで作ろう」
さまざまな材料で自由な工作
を楽しみました。



8/8日、8/15日 「ときめき☆ファッション」
布やひもを用いて、アイデアを生かした新しい衣装を制作しました。

お得な「割引券」をご存知ですか？

当館の企画展チラシには、今年度から「当日観覧券割引券」が付いています。チラシから切り取って窓口にご提出いただくと、その企画展の当日個人観覧券が100円引きで購入できます。新潟市にある万代島美術館でも割引券がついたチラシを配布しています。ぜひご利用ください。

また、近代美術館と万代島美術館のホームページからは、両館で使用できる企画展割引券（こちらも当日券100円引き）を入手できます。なお、併用はできませんのでご注意ください。



路谷楓児展チラシ（裏面）



近代美術館ホームページの割引券

近代美術館ホームページ
<http://www.lai.net.gr.jp/kinbi/>

万代島美術館ホームページ
<http://www.lai.net.gr.jp/banbi/>

「大英博物館展とルーヴル美術館展」

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

この夏、万代島美術館で大英博物館展が、長岡の近代美術館ではルーヴル美術館展が開催されました。世界で有数の二つの大美術館の所蔵作品を、新潟県の二つの美術館で同時に見られるという滅多にない機会で、多くの方にお楽しみいただけたかと思います。

「大英博物館の至宝展」は同館の収蔵品の中から、1万年に及ぶ世界各地域の作品を古代オリエント世界、ヨーロッパ、アフリカ・アメリカ・オセアニア、アジアの四部門に分けて展覧したもので、大英博物館は啓蒙主義の時代に世界の多様な文化を集めて比較研究し理解する目的でつくられたのですが、その目指すところがみごとに紹介されていました。多様な造型を通じて、さまざまな尊重すべき文化のあること、地域や時代を超えて発想や造型に共通点をもつこともあることが感じとれました。私はギリシャ彫刻としてまだ熟さない時期のクローソス（青年）像に強く惹かれましたが、それは動きが出て写実的な後の時代のものと違って、静かな形の肉体的表現の中に精神性を秘めている点に、東洋の仏像に通じるものがあるからでしょう。

一方の「ルーヴル美術館展 中世フランスの秘宝」は、11世紀から15世紀にかけてのフランスのキリスト教美術を、ルーヴル美術館所蔵の彫刻を中心に工芸作品を加えて紹介したものです。この展覧会も私には日本の仏教彫刻との比較で興味深いものでした。

11世紀から12世紀にかけてのロマネスク彫刻として出品されたのは、いずれも教会建築の柱頭彫刻でした。ロマネスク建築ではアーチを支える柱の上部、柱頭が構造上のみならず視覚的にも重要な位置を占め、そこに聖書の人物や空想的な動物、文様などが彫られますが、それらの形態は柱頭の形に応じて決定され、建築と彫刻は極めて密接な関係を結びます。彫刻は自然主義的な原理に拘束されない自由な造型を持ち、その様式化された形態が神の超越性、神秘的な宗教性の表現を可能にしました。そのことは日本の9世紀、平安時代前期の一木造りによる仏像を思い起させます。像の頭部から体部に至る中心部分を、仏の魂がこもるところとして一本の材から彫り出す一木造りの技法は、当然形態上の制約をもたらします。その制約の中で強い精神性が表現されました。また鎌倉時代初めに運慶・快慶などが造った東大寺南大門二王像は、寄木造りですが、これを安置する門の長方形に区切られた空間の制約、それと高さ8mを越える巨像をバランスよく立たせるための構造的制約の中で、むしろそれを逆手にとった形で、安定感に富んだ、しかも激しい力強い動きの表現に成功しています。これらは枠の中の造型といえますが、それが単なるデザインと違うのは、宗教美術として生命感の表出が表現上何よりも求められたからでしょう。

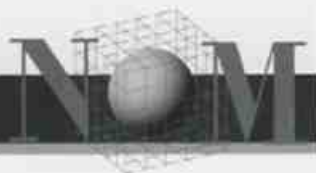
12世紀半ばからのゴシック彫刻について、そこでの作者

銘の記し方が、作者の意識の上で自己主張が芽生えたことを物語っていること、ちょうど同時期の日本の仏像の銘文の上でも作者の自己主張につながる署名が行われるようになったことを、前回「運慶の署名」と題して記しました。ゴシック彫刻と鎌倉彫刻、いずれも表現において写実に向った時代です。写実的表現と作者の自己主張、あるいは作品への署名、その関係は偶然ではないでしょう。ロマネスクの場合のように彫られた対象そのものが主体性を持つのではなく、作者自身が主体性を持ち、様式の枠から解き放たれて自身の目で対象をとらえることから写実が始まるからです。

出陳されたゴシックの高肉彫りの頭像で、正面の写真を見ていたら顔が歪んで妙な感じのするものがありました（挿図）。陳列された実物を見た時、それが正面からでなく、向って少し右から眺めた時にみごとな造型を示すことに気づきました。顔の向って右側を盛上げるように左側よりも量をたっぷりととってあり、そのために右から見ると顔が立体的に見えるのです。つまりこの顔は壁面からいえば少し左向きに浮彫りされていたはずで、これはギリシャ、ローマ以来の高肉彫りのやり方です。この手法はガンダーラの浮彫りに伝わり、さらに中国の唐代の仏像やその影響を受けた日本の天平彫刻にも見えます。東西で受け継がれていった浮彫りの手法であることがよくわかりました。



（複製した彫のある男性の頭像）
12世紀後半から13世紀、ルーヴル美術館蔵
© photo RMN-L. G. Beuzit/Distributed by Sohai Burika Photo



豊かな緑の自然をバックに、酒神バッカスを囲んで、様々な生き物たちが笑い合い、歌い踊り、生命を謳歌しています。もとはジュネーヴの毛皮店「ベンガル虎」に依頼された大画面画。中央には、店名にちなんだ虎がいます。他にも店で扱いそうな動物たちが目につくのは、注文主のリクエストだったのででしょうか。

もともと壁を飾ることを意図していただけに、この作品はとにかく大きく、惜しいことに現在は2つに分断されていますが、両方合わせると幅は4メートルを超えます。高さも2メートル強。1984年のアンギャン＝レ＝パンの売立目録ではフルサイズで記載されていましたが、1986、87年のオークションでは今のサイズの別々の作品として市場に出ているので、その間に切られたものと思われます。現在は元の姿を尊重し、台帳上では2枚で一つの作品として扱っています。

この作品には優れた下絵があり、描かれて間もなく来日し、1922年に木内重四郎蔵として「泰西名画展」に出品されています。このように大変に早い段階から関連作品が日本に紹介され、その後、私たちがドニに親しむ手がかりとなってきたという意味で重要。さらに、この作品は彼の後半生の芸術、すなわち「ナビ派以降のドニ」を考える上で欠かせない一枚でもあります。

《ベンガル虎、バッカス祭》を描く前年の1919年、ドニは妻マルトの死という、人生における大きな喪失を味わいました。マルトが病に伏せていた数年間、ドニの描く作品は黄昏の色彩を帯びていました。主題も「死」や「復活」と関連する宗教主題が中心でした。靈感の源で最高のモデル、子供たちの母親と、ドニにとって全てにも等しい妻の死の衝撃が相当のものであったことは想像に難くありません。

それにしても、人生最悪ともいえる辛い時期を迎えた直後の作品にしては、この明るさは何なのでしょう。バラ色の頬をした子供や、幸福そうに微笑む女性。人を怖れず、のびやかに振舞う動物たち。

そもそも「バッカス祭(バッカナーレ)」は酒の神バッカスを囲んでのどんちゃん騒ぎの場面であり、イタリア・ルネサンス以来、長く描かれてきたテーマです。「宗教美術家」を標榜するドニでしたが、異教的主題に対する忌避感はありません。しばしばイタリアを訪れてはルネサンスの作品を模写し、自らも楽園を想起させるような古典的風景を制作していました。むしろ私見ながら1920年代のヨーロッパに巻き起こる「古典主義」ブームのかなり早い火付け役の一人だったのではないかとさえ思われる節もあるのです。もっとも「バッカス祭」という主題は、古典古代という舞台設定ゆえに許容される裸人・裸婦たちが、さらに酒を飲んで放埒になる場面を描けるというので重宝されてきた主題です。しかしドニは、そのようなメリットは完全に放棄しています。登場人物たちも動物たちも、大らかではあっても、決して淫らではなく、むしろ上品。そして、それぞれが生きる喜び

に顔を輝かせています。

では、なぜドニは「バッカス祭」という主題を選んだのでしょうか。

画面の中ほどには、当のバッカスが黒豹にひかれた車に乗っています。主人公であるはずなのに、やや後ろに身をひいた姿で、まるで照明があたっていないかのように沈んだ色調で描かれています。その顔は、男性ではなく、女性のようなのです。というよりも、見間違いようなく、ドニが繰り返して描いてきた亡き妻マルトの顔に見えます。

ローマ名の「バックス(バッカス)」という「酒のみ」の太鼓腹の中年男性がイメージされるかもしれませんが、ギリシャ神話の世界においては「ディオニュソス」と呼ばれる酒による熱狂や現実からの逸脱と結びつく酒神です。この「ディオニュソス」という名、フランスでは「ドニ」となるのですが、これは偶然でしょうか。

制作年、バッカスの顔、そして主題の選び方などから考えて、この作品には隠された私的な性格がこめられていたのではないかと推測されます。ナビ派時代(1890年代)から、署名をはじめとする「自分自身の物語」を作品に織り込むことはドニの特徴の一つでもありました。その顕著な例として、この作品を位置付けられるのではないかと。

おぼろげに現実から消えていこうとする最愛の妻を取り巻くように、しかし悲しみだけではなく、これまでの感謝といとおしみと、与えられてきたあらゆる喜びの等価物であるかのように「幸福」を体現している生き物たち。周囲の自然さえもが輝かしいこの作品は、もしそう呼んでよければ、葬送の記念画のようなものではなかったのでしょうか。毛皮となる動物たちへの慰霊と重ね合わせるように、亡き妻への想いと感謝の全てを、幸せの塊のような表現へと昇華させた特別な一点ではなかったかと、この《ベンガル虎、バッカス祭》を見ると思われてなりません。

(主任学芸員 佐々木奈美子)



モーリス・ドニ《ベンガル虎、バッカス祭》 1920年 油彩・キャンバス
左: 240.4×259.5cm 右: 232.5×153.0cm

○万代島美術館情報

●大原美術館展
(開催中～10月17日)

●チャイナ・ドリーム
描かれた憧れの中国—広東・上海
(10月23日～12月5日)

所蔵品展Ⅱ 新潟の美術
●新潟に育った作家たち 併設:平成15年度新収蔵品紹介
(12月18日～2005年2月27日)

所蔵品展Ⅲ
●7人の新潟の写真家たち
(2005年3月5日～3月31日)

The Niigata Bandaijima Art Museum
新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市万代島5-1
(朱鷺メッセ内 万代島ビル5F)
TEL:025-290-8655 FAX:025-249-7577
ホームページ www.lalernet.gr.jp/banib/

イベント情報

10月～3月

●企画展

10/9(土)～11/23(火・祝)
「落谷虹児展～少女達の夢と憧れ～」
 (関連イベント)
 10/17日、11/14日「きもので楽し 落谷虹児展」
 当日、着物で来館された方にはささやかなプレゼントを差し上げます。
 10/24日15:00～「遊佐未森 mimori yusa piano solo ～檸檬～」
 無料/申込不要/当館エントランスホール

2005年1/25(火)～3/21(月)
県民の美の財産Ⅱ「日本美術の歩み～近代から現代へ～」
 (関連イベント)
 会期中に当館学芸員による講座・解説会を予定

●所蔵品展示

第3期 9/30(木)～12/23(木)
 前期:11/7日まで 後期:11/9(火)から
 展示室1:昭和戦前期の日本画
 (前期・後期で一部展示替え)
 展示室2:阿部展也を中心に
 展示室3:日本の木版画(前期)
 カラー・リトグラフの世界(後期)



阿部展也(太郎)1949年
 ※9/30～12/23

第4期 2005年1/4(火)～3/27(日)
 前期:2/13日まで 後期:2/15(火)から
 展示室1:女性の姿(前期・後期で一部展示替え)
 展示室2:視線の行方
 展示室3:岡田紅暁 富士を写す(前期)
 ナチス・ドイツと表現主義(後期)



鈴木清方(伝説)
 1923年
 ※1/4～2/13

●巡回ミュージアム

11/5(金)～11/14(日) 三和村福祉センター
 会期中無休/入場無料

●長野県信濃美術館での当館所蔵品展

「日本と西洋 七つの部屋～新潟県立近代美術館・万代島美術館の至宝～」
 11/3(水・祝)～12/19(日)
 水曜休館(祝日の場合は開館し、翌日休館)
 〒380-0801 長野市箱清水1-4-4 (善光寺東隣)
 TEL 026-232-0052

●館長による美術史連続講座

無料/講堂/各土曜 14:00～
 10/16 「蘭成就院の諸像～運慶と東国～」
 11/13 「東大寺南大門二王と興福寺北円堂諸像
 ～運慶と工務制作～」
 水野敬三郎(当館館長)



当館館長 水野敬三郎

●作家による美術鑑賞講座

無料/講堂/各土曜 14:00～
 10/2 「絵画の遠近感」
 鈴木 力(画家・一連会委員)
 10/30 「絵画の模写」
 山本眞也(画家・新潟大学教授)

●美術鑑賞講座

無料/講堂/各土曜 14:00～
 10/23 「落谷虹児～作品とその人生」
 小西珠緒(当館美術学芸員)
 11/6 「大正～昭和の童画家たち」
 宮下東子(当館主任学芸員)
 11/27 「明治の書～日下部鳴鶴をめぐって」
 松矢国憲(当館主任学芸員)
 12/4 「日本画と戦争」
 長嶋圭哉(当館美術学芸員)
 2/5 「新潮の写真家たち 岡田紅暁 渡辺義雄 藤木研爾 牛橋茂雄」
 宮崎俊英(当館学芸課長代理)
 2/19 「油画はどんな表現を可能にしたか～田一後の主題と技法」
 中嶋 均(当館学芸課長代理)

●映画鑑賞会

無料/講堂/各土曜
 10/9 「幕末太陽傳」10:00～/14:00～
 11/20 アート・ドキュメンタリー「バルテュス」
 10:00～/13:00～/15:00～
 12/11 アート・ドキュメンタリー「サンティアゴ・カラトラバの旅」
 10:00～/14:00～
 1/8 「自転車泥棒」10:00～/14:00～
 2/12 「にっぽん昆虫記」10:00～/14:00～

表紙作品解説

岩田正巳 《浜名を渡る源九郎義経》

1936年(昭和11) 147×209cm 絹本彩色、額装

岩田正巳(1893～1988)は、松岡映丘に師事して歴史画と大和絵を学び、大和絵の精神と伝統を踏まえた新様式の確立を目指しました。

ここに描かれているのは、若い源義経とその一行です。鞍馬山を抜け出した牛若は熱田神宮で元服、名を源九郎義経と改め、奥州平泉の藤原秀衡のもとに身を寄せるための道中、浜名湖をわたる場面です。画中、義経の傍の顔巾をかぶった人物は弁慶でしょうか。義経の生涯は謎に包まれて、多くの伝説が作られたので、画家は、実在はしない弁慶も描き込んだのかもしれない。

新潟県立近代美術館便り 雪椿通信 第23号

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市富岡町字総掛278-14 TEL 0258-28-4111 代 FAX 0258-28-4115
<http://www.islanet.gr.jp/kinbi/index.html> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 株式会社 中央印刷(〒940-0041 長岡市学校町1-9-21 TEL 0258-35-3500)

発行日 平成16年10月1日<6000部>

利用案内

■開館時間/午前9:00～午後5:00

※観覧者の数時は午後4:30まで
 レストラン/午前10:00～午後5:00
 キラステオーダー(食事) 午後4:00
 (飲物) 午後4:30
 ミュージアムショップ/午前9:00～午後5:00

■休館日/毎週月曜日

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館。
 ※12/24(金)～1/3(月)、3/28(月)～3/31(木)の各期間は休館。

■観覧料金

- 企画展
 企画展によって観覧料が異なります。
 なお、企画展券で、展示室1・2・3もご覧いただけます。
- 展示室1・2・3
 ●一般/410円(330円)
 ●中等教育(後期)・高校・高等専門学校・大学/200円(160円)
 ※学生証を提示してください。
- 小学・中学・中等教育(前期)/100円(80円)
 ※()内は20名以上の団体料金です。
 ※小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。